女仙

田中貢太郎

市ケ谷（いちがや）の自証院（じしょういん）の惣墓（そうばか）の中に、西応従徳（さいおうじゅうとく）と云う法名を彫った墓がある。それは西応房（さいおうぼう）と云う道心坊主（どうしんぼうず）の墓で、墓の主の西応房は、素養などはすこしもなかったが、殊勝な念仏行者で、生涯人の悪を云わず、他人の罪を被（き）せられても弁解せず、それで咎（とが）められる事でもあるとあやまり入り、それが後になって明白になっても、別に喜びもしないで、そうであったかなあと云ってすましていた。往生したのは天保（てんぽう）十一年×月十三日で、其の前日の十二日には弥陀如来（みだにょらい）の来迎（らいごう）を拝したと云われている。

其の西応房は尾州（びしゅう）中島郡（なかじまごおり）一（いち）の宮（みや）の生れであったが、

猟が非常に好きで、そのために飛騨（ひだ）の国へ往って猟師を渡世にしていた。

某時（あるとき）木曾（きそ）の御岳（おんたけ）の麓へ往って、山の中で一夜を明し、朝の帰り猪（いのしし）を打つつもりで、待ち受けていると、前方の篠竹がざわざわ揺れだした。西応房の猟師は、さては猪か熊（くま）か、とにかく獲物ござんなれと、猟銃を持ちなおして獲物の出て来るのを待っていた。と出て来たのは十六七の綺麗な少女であった。おや人間であったか、それにしてもこんな深山の夜明けに、少女などが平気で来られるものでない。これはどうしても変化（へんげ）の者に相違ない。しっかりしていないと其の餌食にな

る。機先を制して打ち殺せと、用意の錬(ね)り玉(だま)と云うのを手早く込めなおして、著弾(ちゃくだん)距離になるのを待っていたが、少女はすこしも恐れるような気ぶりも見せず、平然として前へ来た。

「頼みたい事があってまいったから、どうかそんな物を引っこめてもらいたい。打とうと思ったところで、鉄砲などの的(あた)るような者でもない、それに一所懸命に狙っておっては、わたしの云う事が判らないであろう」

少女の口辺(くちもと)には微笑が浮んでいた。西応房の猟師は猟銃を控えた。

「わたしは飯田(いいだ)在の、某村(あるむら)の何某(なにそれがし)の娘であるが、今

から十三年前、ちょうど十六の七月に、近くの川へ洗濯に往っておって、遁（のが）れられない因縁から、そのまま山に入って仙人になったが、両親はそれと知らないで、其の日を命日にして、供養してくれるのはありがたいが、仙界ではそれが障碍（しょうげ）になって、修行の邪魔になる。それに来年は、一級仙格（せんかく）が進んで、鈴鹿（すずか）の神になる事になっておるが、両親は今年が十三回忌に当るから、此の七月にまた法要をしてくれようとしておるが、それでは到底鈴鹿の神になる事ができぬ。それで大儀ながらわたしの家（うち）へ往って、以来仏事供養は、無用にしてもらうよう伝えてもらいたい」

西応房の猟師は女の詞（ことば）を疑わなかった。彼は唯唯（いい）として其の命に従った。すると、

「その方は、自分一人の渡世のために、数知れぬ鳥や獣の命を奪っておるが、それでは罪業（ざいごう）を増すばかりである。渡世は猟師に限るまい、何か他の事をするがよい」

西応房の猟師は家へも帰らず、其の足で飯田在へ往って、其の両親と云う者に逢って、仙女の云った事を確めてみると、寸分の相違がなかった。西応房の猟師は、事の不思議さに恐れをなすとともに、猟師の罪業の深い事も覚って、名古屋へ出て武家奉公などをし

ていたが、気がすまないので、江戸へ出て自証院の道
心坊となったのであった。

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集3　新怪談集」春陽文庫、春陽堂書店
　　1999（平成11）年12月20日第1刷発行
底本の親本：「新怪談集　物語篇」改造社
　　1938（昭和13）年
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2004年8月20日作成
青空文庫作成ファイル：